(1934); 小倉: 朝鮮語方言の研究, 上, 208 (1944). 11) 宮部: 植研誌, **24**, 3 (1949); 知里: 分類アイヌ語辞典, 植物篇, 225 (1953). 12) 小野: 日本農業起源論, 72 (1942) 参照。 13) Watt: l. c.; Kirtikar, Basu: l. c. 14) 高橋, 山本 (農学研究, **39**, no. 3, 4 (1951)) は大麦の起源の二元説に賛成する。 15) Watt: l. c., Hooper, Field: l. c.; 日土協会: 日土, 土日大辞典, 204 (1936); Bedevian: Ill. Polyglot. Dic. Pl. Names, 321 (1936). 16) 今岡: 洪牙利語小辞典, 96 (1943). 17) Hooper, Field: l. c. 18) Watt: l. c.; Kirtikar, Basu: l. c.; Bedevian: l. c. 19) Roxburgh: l. c. 20) Kirtikar, Basu: l. c. 21) Roxburgh: l. c., 120; Watt: Dic. Econ. Prod. Ind., VI, **4**, 89 (1893); Hooper, Field: l. c., 181. 22) Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893). 23) Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893); Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penn., 2188 (1935). 24) Sanskrit には Godhuma の外に **Saman** (Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893)) と言う言葉があるが, これは米の Aman と明かに同系であり, Sanskrit への借用語として極めて注目すべき言葉である。 25) Dymock, Warden, Hooper: l. c., **3**, 607 (1892); Watt: l. c., VI, **4**, 89 (1893). 26) 柿原: l. c., 305 (1907); 森: 朝鮮植物名彙, 56 (1922); 村田: l. c., 95 (1934). 27) この朝鮮語と Dravida 語との関係に就いては更に Hulbert: Comparative grammer of the Korean language and the Dravidian language of India, **1905**, (Seoul 発行) なる興味ある論文がある。 28) 陸軍省: 蒙古語大辞典, 下, 290 (1934). 29) Bedevian: l. c., 595 (1936); 日土協会: 日土, 土日大辞典, 204 (1936). 30) 今岡: 洪牙利語小辞典, 84 (1943). 31) 又 Punjab にてはマグサとしての大麦を特に Buza とも呼ぶが (Watt: l. c., IV, 275 (1890); Kirtikar, Basu: l. c.), これは北よりの移入を示すものであろう。 32) 中目: オロッコ文典, 99, 161 (1917). 33) 更に Arabia にては小麦を Burr と言うが (Roxburgh: l. c.), Egypt にても Br と言う (de Candolle 植物の起源 (加茂訳), 650 (1941))。

(大阪工業技術試験所精油研究室)

□檜山庫三: **武蔵野植物記** (pp. 192, pl. 4+53, 内田老鶴圃, 1953 年 12 月 ¥ 320)

東京に住む植物学者は多いが, 武蔵野に蟠居するといえる学者は少い。著者は本書の中心をなす第 2 章武蔵の植物相及び第 3 章武蔵野植物の変遷 (pp. 7-69) でこの地の植物に無限の愛着を示しつつ, 人文と自然環境の歴史を探り, これに裏付けられた現在の植物相を立地別に大観した。その他, 生品から写生された図版或は写真がついた 54 種の植物の説明, 採集地案内, スミレ, タデ, スゲ属の検索表など。武蔵野を故郷としない人々のため, 少くとも本文中に出てくる地名はすべて表紙裏の地図に記入されることが望ましかつた。 (津山 尚)